

Shiripaの星

[シリパのほし]

2004.11
Vol.4



北星学園余市高等学校同窓会誌

です。そうしては欠かせない工具と仕事道具と本間さんの使わないような工具は、本間さんのです。



に入社、その後美容師の資格を取得し、平成2年からは札幌スキンにある「美容室ラグレー」で店長として長年活躍してきました。

今回オープンしたお店は場所柄スキンで働くお客様

さんが多く、夕方過ぎ毎日セットをしに来る人がたくさんいます。

テキパキと次々に艶やかな姿を作り上げ、姿は圧巻です。

アイロンやカーラーなど、他の美容室

ではあまり使わないよ

うな工具は、本間さん

ではあります。彼女たちが蝶のように華やかになつてお店を出て行く姿は圧巻です。

アイロンやカーラーなど、他の美容室

ではあります。彼女たちが蝶のように華やかになつてお店を出て行く姿は圧巻です。

アイロンやカーラーなど、他の美容室

ではあります。彼女たちが蝶のように華やかになつてお店を出て行く姿は圧巻です。

アイロンやカーラーなど、他の美容室

ではあります。彼女たちが蝶のように華やかになつてお店を出て行く姿は圧巻です。



ススキノに美容室オープン!

15期 本間千恵子

高校を卒業後、

美容師として腕を磨いてきた15期生の本間千恵子さんが、今年5月札幌のスキンにほど近い場所に「美容室Chie」をオーブンさせました。

本間さんは卒業後「ソフィア中村」

高校時代、くりくりの目と天然パマの髪がトレードマークだった本間さんは、穏やかな性格と、手先が器用なところが特に男子に人気があり、控えめながら芯の強いところは女子にも後輩にも好かれていました。1年から3年間担任だった吉田先生は、「ちえ」の話をする時いつも「一二二二二二」としていました。

そんな誰からも好かれた本間さんなので、お客様にも信頼され、5月のオーブン以来毎日忙しい日々を過ごしているそうです。キャリアを積み、確実な技術を持つて仕事を続けている本間さんがとても素敵に見えました。

お店は完全予約制で、日曜・祝日はお休みです。「北星

余市に通つていました」と言つて下さい。暖かく迎えてくれると思いますよ。



15期 松村悦子



謹啓 新緑の候 皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび私ですが、5月15日(土)をもちまして「美容室ラグレー」を退職することとなりました。在職中は格別のご厚情を賜り心よりお礼申し上げます。

今後は今までの経験をいかし、5月22日(土)より「美容室 Chie」をオープンする運びとなりました。今まで以上にご愛顧、ご支援くださいますよう、心よりお願い申し上げます。

まずは書中にてお礼かたがたご挨拶申し上げます。

平成16年5月吉日

敬具 本間千恵子

「美容室Chie」開店のご案内
営業時間：11:00～19:30 (予約制・5月は休まず営業いたします)
定休日：日曜日・祝日 (営業時間・定休日を問わず、対応いたします)
住 所：〒084-0807 札幌市中央区南7条西7丁目1033-41
TEL：(011) 561-0740
エタニティ 1F

高 校

ダ・ム

大井戸 百合子先生 ●前田利幸(14期)



H.S



暴力文化
これを持つて行つたらいいのか
がわからず、毎日が憂鬱でした。
授業も成り立たない日が続いた
私にとつてせめてもの救いの体

私自身も悩みのはけ口をど
こに持つて行つたらいいのか
いがあつたようです。学校
でもストレスがたまり喫
煙、喧嘩等も日常茶飯事で
した。

先生は伊藤整と親交があり、伊藤整著「若き詩人の肖像」の中で先生を紹介している。氏の石碑「伊藤整文学碑」（題字は、北見沟吉書）が塩谷の「口ダの丘」に建つてある。こも、また海が一望できる場所である。2人の石碑が共に、海の見える場所というのもなんとも因縁深いものを感じる。

今から47年前、私は余市高

先日、余市の生んだ歌人北見沟吉（本名鈴木重道）先生の石碑が円山公園に移されたことを聞いて、早速行って見た。ここは、小高い丘には、小高い丘になつていて、余市のシンボルである尻

場山をはじめ海が

一望できるところである。

先生は伊藤整と親交があり、伊藤整著



懐かしき先生・ 懐かしき授業

一ノ山



校で北見沟吉先生から、「日本文学史」を教わった。先生は、鼻の下に「チヨビヒゲ」をはやしていて、私たちは、「づまかわ先生」と呼んでいた。授業は独特的な語り口で、短歌を読むときは思わずその中に誘い込まれてうつとりとしたこともしばしばであった。文学の好きな私にとっては、忘れられない授業の1つである。

当時は、今のように物質的には恵まれていなかつたが、教師としての中味も愛情もあって、特徴のある先生がたくさんいた。それだけに、学校も活気があり、授業も面白かつたし、厳しくもあつた。いまでもそれその授業の風景が懐かしく想いだされる。

近頃は、どこの学校も口先だけでなく、教師として実力と本物の愛情を備えた特色のある先生が少なくなつた。そして、教師自身の人格が欠けていることを報道する記事が後を絶たないのがなんとも情けない限りである。

こんな時、当時の先生たちの姿が脳裏をよぎるのである。すでに他界した先生もいると聞く。どうしているだろうか……。

この度、同窓会誌「シリバの星」の原稿を依頼され、さて何を書こうかと迷つたのですが、私の人生の中で最も印象の中を少し振り返つてみようと思います。

私が生まれたのは昭和24年で、戦後のベ

ビーブームの年代であり、受験生の一番多い時期でした。高校を受験した私は、幸か不幸か公立高校に入れず、当時地元に出来たばかりの私立高校になんとなく行くことになったわけです。正直いって、私立高校に行くことが大変恥ずかしい気持ちで一杯でした。

入学当初はまだ学校が完成していくなく、沢町小学校の旧校舎を借りて運営されました。そこには、4つの教室と職員室それにトイレがあるのみでした。入学して来た生徒も、大部

分は公立高校の受験に失敗して来ていた皆色々な思いがあつたようです。学校でもストレスがたまり喫煙、喧嘩等も日常茶飯事でした。私にとって、何よりも良かつることは、先生と生徒が一緒に泥にまみれて取り組んだことです。今では、毎年先生と一緒にクラス会をしています。私はこれが北星余市高校の原点だと思っています。

卒業後、同窓会の役員として生徒の時とはまた違う視点で学校をみることができます。また、当時同窓会の顧問であつた一戸先生や役員の皆さんと幾つかの学校行事にも参加させてもらつたことが私の貴重な財産になっています。私は北星余市高校に入

仲間達の顔を思い浮かべて

1期 品田 敏広



かく、用具もない中で、新校舎も出来、皆と打ち解けて学校も少しずつ面白くなつてきました。



育の授業でも場所がなく、用具もない中で、一番安上がりのマラソンがメインでした。1年目はそんな状況で今から見ると学校の態をなしていませんでした。創立2年目になつて新校舎も出来、皆とも打ち解けて学校も少しずつ面白くなつてきました。



しかし、グラウンドがなく体育の時間には

グラウンド作りのため、先生と生徒が一丸となつてスコットピングやノコギリをもつて、原野の開拓のように精を出したものです。辛い作業ではありましたが、グラウンドが少しずつその面積が広がつていくのを見るに、むしろ楽しさの方が大きかつたような気がします。今思えば、そのことによつて協力して一つのことをやり遂げる大切さを学んだように思つています。

夏休み後に業者の人達のおかげもあつて、グラウンドが完成し、そこで楽しくソフトボールをしたことが今でもはつきりと脳裏に焼きついています。

私は公立高校の受験に失敗して来ていた皆色々な思いがあつたようです。学校でもストレスがたまり喫煙、喧嘩等も日常茶飯事でした。卒業後、同窓会の役員として生徒の時

はまだ違つて学校をみることができました。また、当時同窓会の顧問であつた一戸先生や役員の皆さんと幾つかの学校行事にも参加させてもらつたことが私の貴重な財産になっています。私は北星余市高校に入

メ・モ・ラン・

●一戸弘利先生 ●品田敏広(1期) ●

北星余市高校と私

大井戸 百合子



まだ実も青い葡萄棚の小道を通り抜け、北星余市高校の木造りの門を初めてくぐりました。北海道教育大学美術科を卒業し、好きな美術の道で教鞭を執り始めた昭和48年夏の日のことです。

札幌の自宅にほど近い公立校で3年間の高校時代を過ごした私には、教師と生徒との間では「距離」が近く自宅からは遠い、そしてガリガリの受験校でない自由な環境で教えることが内心夢でした。北星学園はこんな私の希望にピッタリの学校でした。それから30年



間、札幌からの列車の車窓から、四季折々それぞれに語りかけてくれる景色を楽しみながら余市までの2時間の「小さな旅」を楽しんでいます。

これまで北国の海辺や市井（しせい）に生きる逞しい女性達に想いを寄せ銅板に描き続けて来ましたが、一方では若い世代の純眞な世界にも強い共感を抱いています。

星のついた紺色のセーラー服や詰襟の黒い学生服はもう無くなりましたが、職員室を訪れる生徒達の元気さや豊かな個性は今も昔も変わりません。私は、こんな若者達に美術を教え、共に学び合える時間をとても大切に思っています。

北星余市高校で最初に私の授業を受けてくれた生徒さんも今では40歳位になつてゐる筈。教え子の胸の中に、学び舎への想い出と共に、絵の心がいつまでも育まれて行くことを日々願つて止みません。



今、思うこと

14期 前田 利幸



私は現在、組織の中で経営革新としての新規事業の開発を担当しています。新規事業の開発とは、既存事業の他に新たな事業のコンセプトを確立し、立ち上げ推進するセクションです。そのセクションの責任者として日々チャレンジしています。

ではなぜ従来の業務の他に新たな事業を求めるのか。それは、最終的に企業の生き残りを賭けているからです。世の中は目まぐしく日々変化し推移しています。様々な環境の変化に対応しなければ生き残れない厳しい時代なのです。北星学園余市高校

でも退学者の受け入れを押し進めておりますが、有る意味生き残りをかけた点では企業と同じものと考えます。少子化により私学の経営も切迫しているのが現状だと思います。このセクションは日々葛藤の連続です。新たな事業を推し進めていく上で費用対効果はどうか、もっと利益のできる方法、事業はないか、知的財産権である特許法、意匠法、商標法等には問題はないか、等々日々迷いの連続です。しかし、そんな時も同じセクションに仲間がいることが救いとなります。迷いがあれば相談し、解決の方法を模索し最善の方法を検討する。これらは、高校生活の中で学んだ「みんなで意見出し合い、考え方解决问题」。この基本が自分の中にあるからだと改めて感じています。



最後に私の持論をひとつ紹介します。それは、「勉強は自分が必要だと思ったときが、一番自分で吸収できる」と言つことがあります。私の職場は、技術職がメインの仕事であり工業系の卒業者を中心として職員の採用を行つています。その環境の中で、20数年勤務してきました。絶えず「いいコンブレックス」を持ち続けながら。「絶対こいつらには負けたくない。技術でも営業でも。」「これは俺にしかできない仕事をだ。」この負けん気だけで自分を支えてきたような気がします。

これは母校で養つた財産のひとつです。そして、私が考えるには今がその勉強の時だと感じています。

現在、通信教育で経営の勉強をしていますが、「今度は企業経営でも負けたくない」。そう自分自身に問い合わせながら正しい道を求めて、葛藤を繰り返しています。それは私のやり方で扉を叩き、それを俺流のやり方で開いていく。そこに求め続ける何かがある。そう信じています。

同窓会の歩み

1967. 5 同窓会結成
初代会長 筒井末美(1期)
1969. 4 同窓会会則
1974.10 北星余市高校創立10周年式典
1976. 1 定期総会・新年会
支部体制確立(余市・札幌・東京支部)
会則一部改正
- 1978.10 同窓会10周年記念式典(30数名参加)
グランドピアノ学校に寄贈
1979. 4 同期会の組織作り始まる
1981. 1 定期総会・新年会
1982. 4 2代目会長 品田敏広(1期)
会則一部改正
- 1984.10 北星余市高校創立20周年式典
同窓会誌作成
- 1994.10 北星余市高校創立30周年式典
1996. 7 3代目会長 伊藤賢治(7期)
1998. 4 会則改正
2001. 4 4代目会長 馬場 希(12期)
同窓会会員名簿作成
- 2001.12 同窓会会報「シリバの星」創刊
2003. 4 売店運営スタート

同窓会活動

在校生への支援

- 奨学金・就学援助金
- 行事への援助
強歩遠足・学園祭・弁論大会・クラブ等(全道・全国)
- 卒業生への記念品(卒業証書用箇)
- 校内の自販機の管理運営
- 課外活動援助(バスケットボール)

- 卒業生名簿整理
同窓会会報発行

在校生への支援

○奨学金・就学援助金
○行事への援助
強歩遠足・学園祭・弁論大会・クラブ等(全道・全国)
○卒業生への記念品(卒業証書用箇)
○校内の自販機の管理運営
○課外活動援助(バスケットボール)

卒業生名簿整理
同窓会会報発行



おくやみ

謹んでご冥福をお祈り致します

- 35期／西垣はるかさん
… 2004年2月
- 28期／山本 寛樹さん
……………7月
- 10期／佐藤 康則さん
……………8月
- 15期／長船 隆行さん
……………9月
- 北口 時雄先生
……………8月

台風の跡



9月8日早朝から台風による強い風が吹き始め、吹き返しによる記録的な強風で校舎に打撃を与えました。

旧校舎の屋根の一部がはがされ、合宿所は屋根がとばされ使用不能の無残な姿になってしまいました。現在、急ピッチで修復作業を行なっています。

子供も北星余市に毎年入学する状況が見られます。希望したときは就学援助金を支給します。希望される方は一定の手続きが必要です。同窓会事務局まで申し込んで下さい。2002年度より6名が受給しています。

連絡先 事務局(担当 安藤栄子) TEL 0135-216097 FAX 0135-226097

就学援助金5000円(月額)を支給
子供に北星余市を勧めよう

10年間の約束を実現

27期

森田敦子

10月10日台風が日本列島を横断する中、3年E組初代塚原一家が10年ぶりに余市に集合しました。本州からの飛行機は出発時間直前まで離陸するか否かの発表がされ、各地から集合できるのだろうかと気を揉みながら、こんな時に限つて最大級の台風に当たるなんて…さすが一筋縄ではいかない北星余市だなあと思ったものです。

10年という時の流れを経て再会した旧友の中には、幸せな家庭を築いている者、結婚生活を破綻させた者、会社を興した者、齢の積み重ねと共に巨大化した者などがおり、それぞれが様々な人生を歩んでいることを報告しあい、また参加できなかつた者から次々に連絡が入り、話は尽きることなく時間が過ぎてゆきました。



▲卒業アルバムより

「10年ぶりに3Eのみんなに会えて本当に嬉しかったです。女性たちはみんな色っぽさが増して奇麗になり、男性たちも渋さが増しかつて良くなつていました。まるで10年の時の流れを全く感じませんでした。(中略)

卒業文集のあるページに「2004年に同窓会を開こう」と書いてありました。そんなことは時の流れとともに完全に忘れていましたが、よく考えれば今年は2004年。そしていつの間にか、当時の企画を実現していました。

に気がついた時はかなり感動でした。なかなか簡単には集まれないけど、必ずまたやりましょう。俺にできることがあれば協力します。」

余市は雪虫がたくさん飛んでいました。帰る日の夜には落ちて来そうなほど満点の星が見えました。私たちはこんな素敵な所に住んでいたんだなあ。私たちはいやでも毎日顔を合わせていたのに、今じや10年に1回みんなで会えるか会えないかなだなあ。」

担任だった塚原先生を始め、当時の担任団の佐々木先生や山先生、千葉先生、そして他のクラスだった同士までもが駆けつけくれ、懐かしい名前がぽんぽん飛び出し、すっかり笑いジワが増えた一夜でした。

地元に戻つてほどなく届いた、参加してくれた者からの手紙の一部をご紹介します。

Shiripaの星 Vol.4

2004年11月10日発行

- 顧問 篠輪菊雄
編集長 松村 悅子 (15期)
副編集長 松浦 一法 (12期)
編集委員 安藤 栄子 (1期)
本間美智子 (5期)
馬場 希 (12期)
平野満寿美 (14期)

[発行]

北星学園余市高等学校同窓会「シリバの星」編集委員会
〒046-0003 余市郡余市町黒川町96番地
TEL (0135)23-2165 FAX (0135)22-6097
E-mail hokuseiy@netfarm.ne.jp